

刊行にあたって

時代は MI (Minimal Intervention) から OI (Optimal Intervention) へ

2002年の10月にウィーンで行われたFDI（国際歯科連盟）においてMI（Minimal Intervention：ミニマルインターベンション）が提唱され、世界的な潮流となっている。これは、接着技術の進歩により、それまで100年以上続いたG.V.Blackの窩洞形成における予防拡大という概念からの脱却が、その趣旨であった。顕微鏡の普及などもMI実践の一助となっている。

MIコンセプトは、接着技術の進歩によって予防拡大の必要がなくなり、最小限の歯質の削除量で修復が可能になったということである。これは、材料の進歩による必然である。しかし、このMIコンセプトを誤って解釈し、どんなときでもなるべく歯を削らないことが、良心的で近代的な歯科治療だと考えている歯科医師が増えている。

そこには、口腔内全体の診査・診断が考慮されておらず、1本の歯のう蝕に対する治療デザインだけである。その歯は歯列のなかに位置し、上下の咬合関係を持ち、動的な咀嚼運動やブラキシズムを行っている。そして、その歯の持ち主は年齢を重ね、やがて介護のお世話になるかもしれない。それらをすべて考慮したうえでの最適な治療介入、OI（Optimal Intervention：オプティマルインターベンション）を行うべきなのに、まるで抜去歯を治療するかのように画一的に治療が行われている。

OIとは、最適な治療介入のことである。咬合状態などをまったく変える必要のないときにはMIがよい。しかし、歯のわずかな傾斜や形態の補正、咬合接触状態を改善する必要があるときは、フルクラウンのほうがよいこともある。それは1本の歯だけを考えるのではなく、口腔内全体のバランスや、その人のライフサイクルや価値観を考慮した診査・診断が必要であり、包括的な治療計画のなかでOIを考えるべきなのである。

本書では、包括的歯科治療を行うにあたり、従来の方法とは一線を画す新しい概念やツールを紹介している。それは、従来のものよりもはるかに理論的であり、かつ簡便で実践的な方法である。そして、これからますます進化していくデジタル機器を使いこなすためにも、本書で紹介するTOPアナライザーコンセプトが必ず役に立つと確信している。

読者諸氏が従来の概念にとらわれず、歯科医療の本質を見つめ、新しい時代の扉を開けていかれることを願っている。

2020年1月

田ヶ原 昭弘